

# 算命学中庸

## 【初年】 1 1 回目

1 1 回目の授業はこのページからです。

授業科目           【宿命と自然】

【初年】 1 1 回目【宿命と自然】 01

ここでは「宿命しゅくめいと自然しぜん」という勉強です。

このあと、だんだんと実践的な勉強が多くなってきます。

その前に、算命学の運勢うんせいについて、知っておいて頂きたい考え方があります。

それについてご説明します。

算命学で考えているところの、運勢の仕組みともいえます。

⇒ 「人間も自然物である」 この考え方は自然思想です。

自然思想

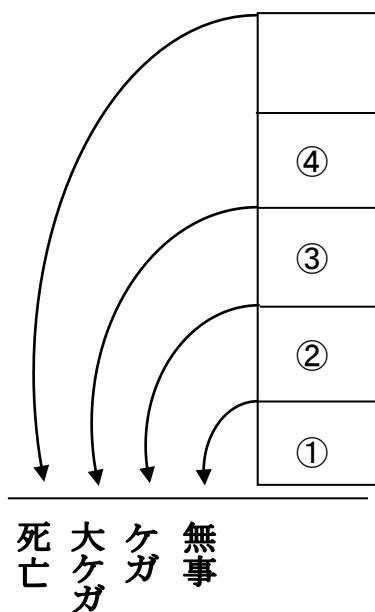


運勢も自然のあり方に基づいている

人間そのものが自然物なのだから、人間の運勢も自然のあり方に基づいているはずだ。そのように考えています。そこで、運勢の仕組みについて、ご一緒に考えて頂きたいのです。

⇒ 運勢の仕組み 宿命（1）運勢の仕組み

〔たとえば〕ここにビルが建っているとします。



ある人が1階の窓から、地上に飛び降りたとして、一階の窓からだったので無事だったとします。

ところが、2階の窓から飛び降りたら、ケガをしました。

今度は、3階から飛び降りたら、大ケガになってしまった。

それが屋上から飛び降りたら、ケガでは済まずに死んでしまった。かりに、このような結果になったとします。

1階から飛び降りたら無事だったのに、2階から飛び降りたら、ケガしちゃいました。

3階から飛び降りたら、大ケガになって、屋上から飛び降りたら死んでしまいました。

そうだとしたのならば、どの人であっても、これとおなじ事をやれば、似たような結果になるはずです。

なかには、奇跡的に2階や3階から飛び降りても無事だった。

ということもあるかも知れませんが、しかし——誰でもこれと、大差ない結果になるはずです。

このような事を行って、誰もが大差のない結果になるとしたら、これは一体誰が決めたことなのでしょう。

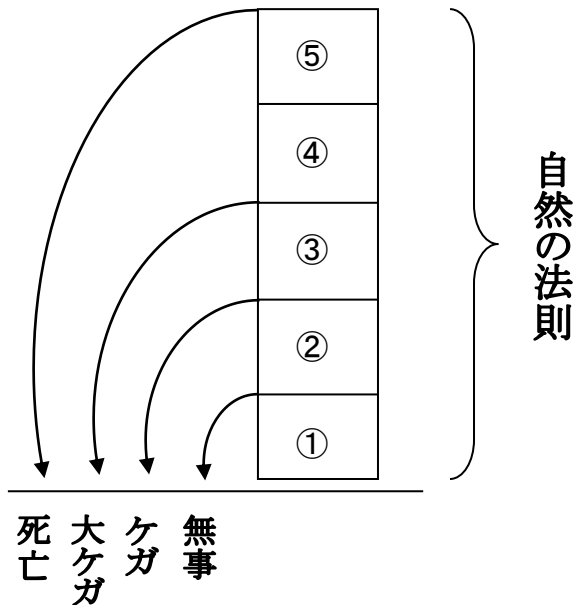
誰がやっても似たような結果になります。

これは一体、誰が決めたのか？……そう、自然です。

高い所から飛び降りれば、大きな <sup>わざわい</sup>禍 を受けることになります。

このこと自体——これは“自然の法則”であると、算命学では考えるわけです。

## 宿命（2）運勢の仕組み



まあ、これ位の高さから飛び降りたのなら、大丈夫だけれども、これ以上の高さから飛び降りたら、無事では済みませんよ。

これは人によって、多少個人差はあるものの、誰がやっても似たような結果になるはずですよ。

自然が人間という生き物をつくったときに、人間の肉体は二階ほどの高さから飛び降りても、無事でいられるようにとは、つくられなかったということです。

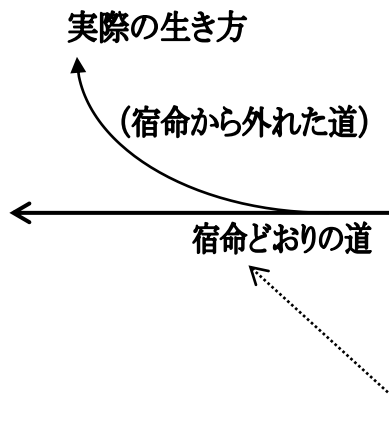
算命学は、このこと自体を自然の法則だと考えています。

人間が高い所から飛び降りれば、それに相当する強い衝撃を受けて、大きな <sup>わざわい</sup>禍を受けることになります。

運勢もこれとおなじ仕組みになっている。そのように算命学では考えています。

☞ 算命学で考えている“運勢の仕組み”を書いてみます。

### 宿命（3）人生の道



運勢の仕組みとして、もともとこの人物にとっては、宿命どおりの道を歩むのが本来の姿です。ということが、生まれた時点において、すでに決まっていると、算命学では考えています。

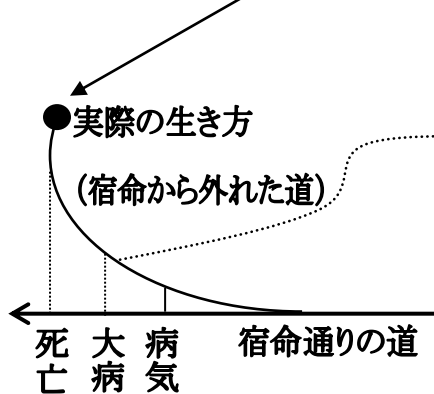
生まれてから、このような人生〔宿命どおりの道〕を歩いて行くのが、この人物にとって宿命どおりであり、それは決まっていると考えてください。（もちろん直線のように平坦な道ではありません）しかし、実際このとおりに歩むとは、決まっていけないのです。もしかすれば、宿命どおりの道から外れて、まったく異なる人生を歩んでしまう。かも知れないわけです。

そこで、この人が実際に歩んだ道は宿命から外れた道・生き方であった。と仮定します。そうしますと、自然が与えてくれた本来の生き方は宿命どおりの道だったはずです。

ところが **宿命（3）人生の道** のように、なにかの都合か、なにかの理由で、**実際の生き方** は（宿命から外れた道）を歩んでしまった。

つまり——この人は、宿命から外れたために、本来の道ではなくて、カーブした道を歩んでしまったわけです。

このときに、宿命どおりの道から外れて、**宿命（4）人生の道** のように、ここまで来てしまったとします。（大きくそれてしまった）



この人は、この分だけ宿命からはずれたことになるのです。

宿命どおりの道から、かなり外れてしまったことになります。

〔たとえば〕本来の宿命から、大きくそれたことで、大ケガをしたとか、より重篤<sup>じゅうとく</sup>な病気になってしまうとか、もっと宿命から外れると、病気では済<sup>す</sup>まないで、死ぬということも起こります。

宿命から大きく外れると、それに比例するだけ大きな禍が、その人に与えられてしまう。と考えています。

宇宙の摂理<sup>せつり</sup>は正直です。

この人物は当たり前と考えていても、当たり前ではないのです。この人に与えられた“宿命どおりの道”は、小宇宙といわれている人間が歩む道であり、この人が歩む道なのです。

算命学では、運勢の仕組みは、基本的にはこのような姿になっていると考えています。 **宿命（3）人生の道** **宿命（4）人生の道**

これは算命学で考えている運勢の基本的な形です。

**宿命（1）運勢の仕組み** **宿命（2）運勢の仕組み** のように、高いビルから落ちる話を考えたときに……その落ちる足場が高ければ、高いほど、大きな禍を受けるのとおなじです。

個々の宿命から、大きくそれれば、逸れてしまうほど、大きな禍がその人に与えられてしまう。と考えています。

☞ これとおなじ仕組みは、仕事にも存在しますし、結婚にも、財産にも、子供と親との縁えにしにも、あらゆる事象に、このような基本的仕組みが存在しているわけです。

☞ [たとえば] 仕事で考えてみましょう。

もともと備わった性格、生まれながらの性格は誰にもあります。自分にはこのような仕事に向いているだろうとか、こういう生き方が自分らしいとか、さまざまあるわけです。

ところが、実際入った会社はそうではなかったとか、自分に向かない仕事をやらされたとすれば、相当なストレスが溜まります。

しかし、無理をしても、その仕事を続けなければならないわけです。その無理を重ねれば、〔たとえば〕病気という姿で、その人に跳ね返って来ることも起こります。

それなのに、もっと頑張っ、もっと無理して、その仕事を続けたとしたら、かなり大きな病気になって、その人に襲いかかってくることになるでしょう。

もっと頑張っ、もっと無理して、向かない仕事を続けていけば結局そのことに起因して、自ら寿命を縮めることにつながるはずみずかです。

⇒ 結婚でもおなじです。

もともと自分には、このような結婚生活が向いている、合っている。というのがあるかとおもいます。

性格の傾向とか、素質とか、いろいろあるわけですが、算命学では、それを宿命から割り出して行くのです。

「自分に向いている結婚生活はこのような生活です」というのがあるのに――〔たとえば〕妻が夫の意見を、ついつい聞き入れてしまっ、本来自分が求めていたのとは違っ結婚生活を、嫌々ながらするはめになっしまった。とします。

女性本人は、とても社交的な性格で、家のなかにじっとしている

のは“性<sup>しょう</sup>に合わない”——外でバリバリ働いて活躍するほうが向いている。そのような資質<sup>ししつ</sup>だとします。

でも、夫は「家にいて欲しい」という考え方の人で、妻は家のなかで家庭的な事ばかりやらされるとしたら、すごくストレスが溜まりますよね。

彼女の不満はどんどん膨らんでいくはずです。

不満が大きくなって、それでも我慢して、性に合わない結婚生活を続けて行けば、当然ですが夫婦仲が悪くなります。

それでも無理して、結婚生活を続ければ、風船は爆発します。

結果としては、体調をくずしてしまい、病気になるということも起こります。

その状況はもう夫婦中が悪いというだけでは済まなくて、精神的、肉体的な疾患に向かうとか、離婚になるわけです。

退化的疾患・ガンの原因の大多数は、ストレスに起因しているという報告もありますし、ストレスで殺人という事例もあります。つまり、この女性（妻）にとって「家庭の外で活躍できる場所をもつ」という生活の仕方が宿命どおりなのです。

☞ 生年月日から宿命をだして、宿命にそのように書かれていればです。

そうであれば——仕事だけではなく、それが趣味であっても、ほかのことでも結構です。

とにかく家庭生活だけではなく、精神を開放して夢中になれるものがあればよいわけです。

そうしますと、非家庭的ということで、宿命通りしゅくめいどうに生きた有名人あを挙げてみます。

⇒ 宇宙飛行士の向井千秋さん。

✽ 向井 千秋 1952(s27)-5-6 [2020年⇒68歳]

宿命（5）向井千秋

						1 甲辰	
	壬	乙	壬		貫索星	天庫星	11 癸卯
寅	子	巳	辰	石門星	車騎星	調舒星	21 壬寅
卯		戊	乙	天将星	調舒星	天馳星	31 辛丑
		庚	癸				41 庚子
	癸	丙	戊				51 己亥
							61 戊戌

1977「丁巳」慶応義塾大学医学部卒業、外科医として病院勤務。

1985「乙丑」〔33歳〕宇宙開発事業団（現・宇宙航空研究開発機構）入社。



守備本能〈石門星・貫索星〉の大運天中殺です。

勉強は受け身ですから、天中殺のときに励むのはよいのです。

彼女は自分の目的に向かって邁進したでしょう。

慶応義塾医学部スキー部では、東日本医学部スキー大会の回転で優勝しています。これは主星の車騎星の成せる技です。

彼女は自分の意志を貫きとうして医師になりました。しかし、残念なことに、医師免許の取得が天中殺のときです。

そこには算命学の定法があります。天中殺は不自然融合です。

【初年】 63回目からの【天中殺の心得】を参照ください。

彼女は〔調<sup>ちょうじょせい</sup>舒星〕を2つもっています。調舒星は感性の星、空想力が豊かです。物心がついた頃から、宇宙の星々に夢を描いていたのかもしれませんが。

1983年〔31歳〕からの大運は「辛丑」がまわっています。

大運の星は〔玉堂星＝知恵の星〕です。

1985「乙丑」〔33歳〕（現・宇宙航空研究開発機構）入社。

ここでも猛勉強したことでしょう。

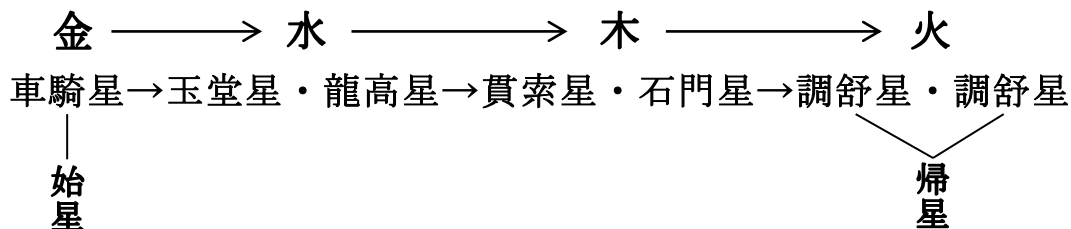
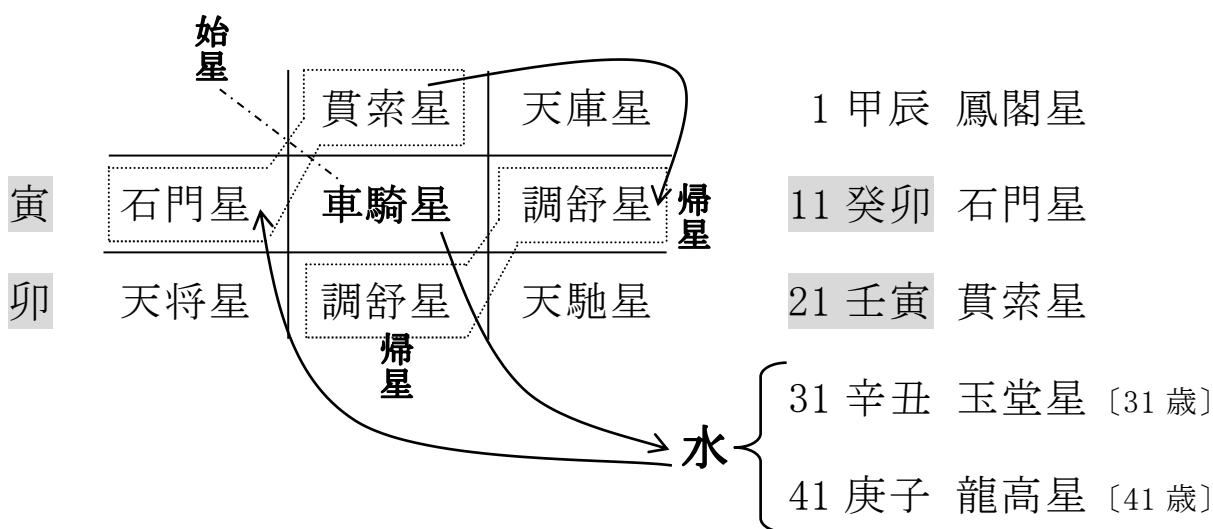
1985年8月10日〔33歳〕宇宙飛行士に選出されました。

1986年〔34歳〕のとき、向井万起男氏は病理学医師と結婚。

夫の万起男氏は、宇宙へ旅立つ千秋さんに全面協力したのです。1994年〔41歳〕からの10年間の大運は〈龍高星＝知恵の星〉がまわっています。龍高星には（外国の星・改革の星・離別放浪）という意味もあります。

1994年〔42歳〕「日本人・初の女性宇宙飛行士として、スペースシャトル・コロンビア号に搭乗』しました。

この時期に人体図の星が循環します。宿命（7）向井千秋



彼女は〔調舒星〕を2つもっています。調舒星は感性の星、空想力がふくらむ孤独の星です。物心がついた頃から宇宙の星々に夢を描いていたのかもしれませんが。

☞ デヴィ夫人もそうです。

✽ デヴィ・スカルノ 1940(s15)-2-6 [2020年⇒80歳]

宿命（8）デヴィ・スカルノ

						1 丁丑	
	己	戊	庚		調舒星	天堂星	11 丙子
申	卯	寅	辰	車騎星	石門星	車騎星	21 乙亥
酉		戊	乙	天胡星	石門星	天極星	31 甲戌
		丙	癸				41 癸酉
	乙	甲	戊				51 壬申
							61 辛未
							71 庚午

1959(s34)「己亥」[19歳] インドネシアへの開発援助にともない、スカルノ大統領の元へ旅立つ。

1962(s37)「壬寅」スカルノ大統領と結婚（第三夫人となる）

デヴィ夫人の半生はご存知のように、コパカバーナ（赤坂の高級クラブ）でホステスをしていたときに、接待で招かれたスカルノ大統領と知り合い、大統領夫人としての途へと歩みました。大統領夫人から社交界にデビューして『東洋の真珠』と評された時代もありました。

家庭におさまるような人ではないのです

彼女も運勢を味方につけたといえます。

非家庭的という意味では、宿命通りといえる生き方です。

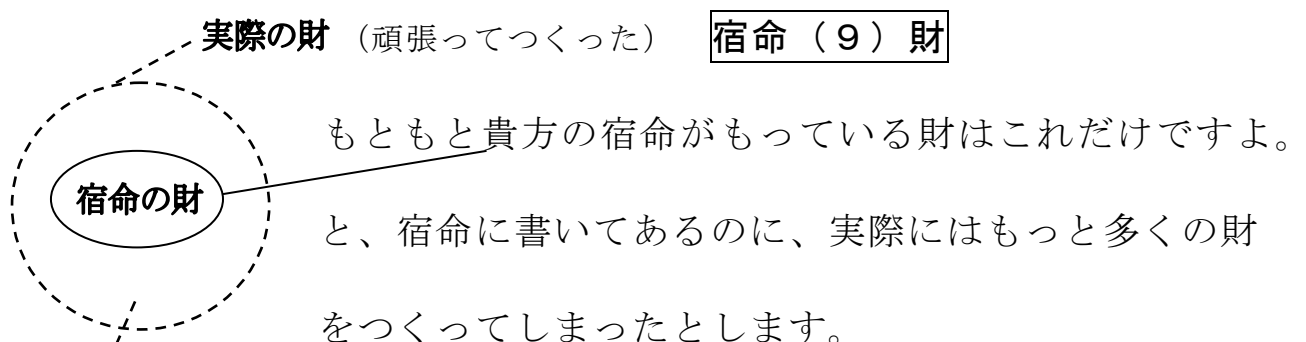
算命学を勉強していくと、そのような観方も出てきますが……、

『財産』にも、おなじ仕組みがあります。

### ⇒ 財運もおなじです。

〔たとえば〕「貴方に与えられた宿命の財運はこれだけですよ」という財の姿が宿命からでてきます。宿命から割り出すときに、その人に与えられた宿命の『財運』というものがあります。

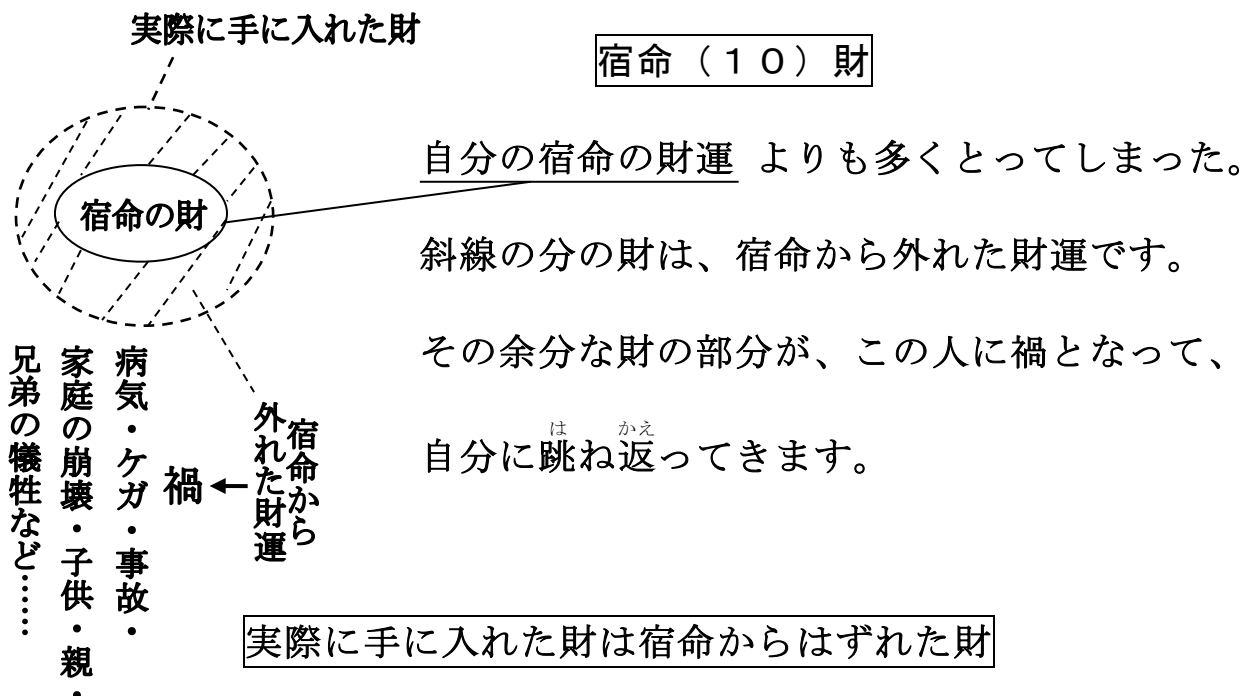
〔たとえば〕 あなたの宿命がもっている財とは……。



実際に手にした財は、無理をして、頑張って、これほどにも大きくしてしまったとします。

自分の宿命にある財運より、それ以上に財を欲しがる人は多いわけです。もしも、この人が、宿命の財（小さな楕円形）よりも、大きな円形の実際の財をつくってしまうと、宿命からはずれた財になります。

本来の宿命として、与えられた財運よりも多いわけです。



具体的に宿命を観ていきますと……どのような禍なのかというのは出てきます。[たとえば] 病気、ケガ、事故、家庭の崩壊、子供とか親の犠牲など、その様相はさまざまです。

世の中には「お金は腐らない、いくらあってもいい」とそのような言い方をする人がいますが、実はお金も腐ります。

〔たとえば〕人間の体<sup>からだ</sup>でも「自分の体に必要な栄養は、これだけですよ」と、ある程度決まっているはずですが。ところが、相撲取りのように、体重を増やすために余分に摂取しまえばどうなりますか、結果的に糖尿病とかの疾患を抱えてしまったとかになるでしょう。

このことは相撲取りだけに限ったことではなくて、不摂生<sup>ふせつせい</sup>な食生活をすれば、誰にでも起こるはずですが。

自分のからだが必要としている分量があり、それ以上の栄養・食べ物を摂取すれば、過剰な分は必ずその人にとっての禍<sup>わざわい</sup>となって返ってきます。

多く食べれば、食べるほどに健康になるのではなくて、過食すればするほど、健康を害する事態につながって行きます。多く摂り過ぎても禍になりますし、不足しても禍となります。

運勢もそれとおなじ仕組みになっているのです。

☞ 本人はすでに他界しましたが、武富士の会長（武井保雄）が逮捕された事件がありました。

それは武富士に批判的な記事を書いたマスコミを盗聴したという事件でした。

その後の調べでは、ほかにもおなじ事をした事実があり、一緒に逮捕された部下によりますと、武井会長の指示で、非合法的なことを、色々やっていたということでした。武富士の会長が一代で築いた財は、当時、数千億円から一兆円といわれていました。

＊ <sup>たけい</sup>武井 <sup>やすお</sup>保雄 1930(s5)-1-4 2006 [76歳他界] 宿命(11)武井

		10 乙亥
甲 丙 己	司禄星   天胡星	20 甲戌
子 寅 子 巳	贯索星   玉堂星   鳳閣星	30 癸酉
丑 戊 戊	天禄星   鳳閣星   天恍星	40 壬申
丙 庚		50 辛未
甲 癸 丙		60 庚午
		70 己巳

生前の会長は、1兆円も資産があって、日本一の資産家であるのに、犯罪をしてまで、財産を増やそうとしたわけです。

事件当時、武井会長は73~75歳くらい、すでに多額の資産があって、それ以上に財を増やして、なにに使うのでしょうか。

宿命にあるよりも、多い財を取ってしまうと、その余分な財が、必ず、その人を“生きづらくする”ことに作用します。さきほどの話で、身体が必要としている以上に栄養を摂ってしまうと、必ず余分に摂取した栄養が、その人を生きづらくするほうへ作用することと、まったくおなじなのです。

宿命にある財運以上に財を取ってしまうと、本人が満足しなくなるのです。

宿命を超えた財運を取ってしまうと、自らの人生そのものに対しても、不満足になってきます。

すでに莫大な財産があるのに、とてもそれでは満足できなくなってしまい、犯罪をおかしてまで、もっと財産を取ろうとするのです。

もっと財産を、増やそう、取ろうとすればするほどに、より生きづらくなります。そして、何らかの事象により必ず人生が曲がって行きます。

武井会長も財産を増やそうとしなければ、もっと有意義で、人間性のある老後を送れたはずです。

端的<sup>たんてき</sup>に言えば、もともと自分に与えられている分<sup>ぶん</sup>という  
ものがあり、その人自身の分を超えた量を取ってしまう  
と、必ず、自分の分を越えた部分が、その人自身の人生  
を曲げることに蠢<sup>うごめ</sup>きはじめます。

参考・端的（率直なさま）

参考・分<sup>ぶん</sup>（わりあて）

⇒ このことは「財」に限ったことではないのです。

「名誉」もおなじで、出世することが良いとは、必ずしも決まっていません。

自分の分<sup>ぶん</sup>を超えた出世<sup>こ</sup>をしてしまうと、その分を超えた  
部分が禍<sup>わざわい</sup>となって、その人に跳ね返って来ます。

☞ <sup>かみそうかずひで</sup>上草一秀は大学教授で、経済評論家として、一時期はテレビに出演して活躍していました。

ところが“のぞき”で逮捕されたのです。

上草教授は名誉運が少ない宿命です。名誉運は少なくても優秀ですから、出世して名誉が重くなったわけです。

＊ 上草一秀 1960(s35)-12-18 事件当時〔45歳〕

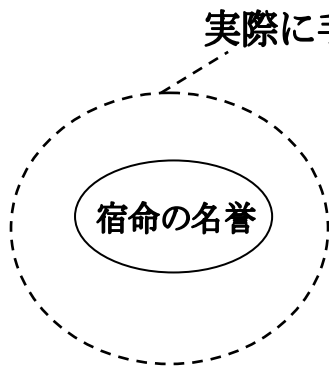
宿命（12）上草

						6 己丑
	庚 戊 庚		貫索星	天極星		16 庚寅
申	辰 子 子	調舒星	調舒星	調舒星		26 辛卯
酉	乙	天印星	龍高星	天極星		36 壬辰
	癸					46 癸巳
	戊 癸 癸					56 甲午
						66 乙未

大学教授なので、テレビに出演して有名になる、そういう生き方のほうが、本人も悦<sup>よろこ</sup>びでしょう。また、そうなったほうが良いと思って、生きて行こうともなるでしょう。

ところが、実際の名誉は 宿命（13）名誉 のように、内側の楕円形です。

宿命（13）名誉



実際に手に入れた名誉

宿命を超えた分の名誉を与えてしまうと、  
それは彼自身の重荷になります。

実際に手に入れた名誉は宿命からはずれた名誉

高望みが重荷でストレスを感じるものですから、加重の部分が  
“のぞき”に繋がっていったわけです。

宿命以上に名誉が上がってしまったわけですが、考え様によって  
は、事件を起こしたことで、職を失うと、あるいは、名誉が失墜  
したことで、宿命本来の名誉運に戻れるかも知れないのです。

あの事件によって戻れるということであれば、そのほうが、その  
人にとって、生きやすい状態になって行きます。

華やかな人生は送れないかも知れませんが、むしろそのほうが  
助かるといえます。あのまま、ドンドン名誉が上がっていけば、  
いつかは死ぬ……ということにつながりかねません。

死ぬことでしか、本来の宿命の姿に戻れなくなってしまうという  
意味です。宿命から大きく外れて、本来の姿に戻れなくなれば、  
死に直面することになります。

⇒ さきほどの話で、体<sup>からだ</sup>が必要としている以上の食物を摂取すると、身体の調子が悪くなって、病気になったとすれば、しばらくは食べられなくなったりして、また、宿命通りの肉体にもどれますよね。

しかし、病気という警告に逆らって、ドンドンドン 食べ続けたら、病気という状態で収まらないで、死ぬ招くことになります。それゆえに、途中で名誉を失ったというのは、むしろ、その人にとっては良いことであったわけです。

そういうことも有り得るのです。

自分の分を超えたところまで偉くなってしまおうと、結局、その名誉はその人にとって、負担にしかならないのです。負担になるのに、無理をして名誉を維持し続けた。その結果として、病気になるか、あるいは別な禍<sup>わざわい</sup>に振り替えて、また別の禍として、発現するとかのいずれかです。

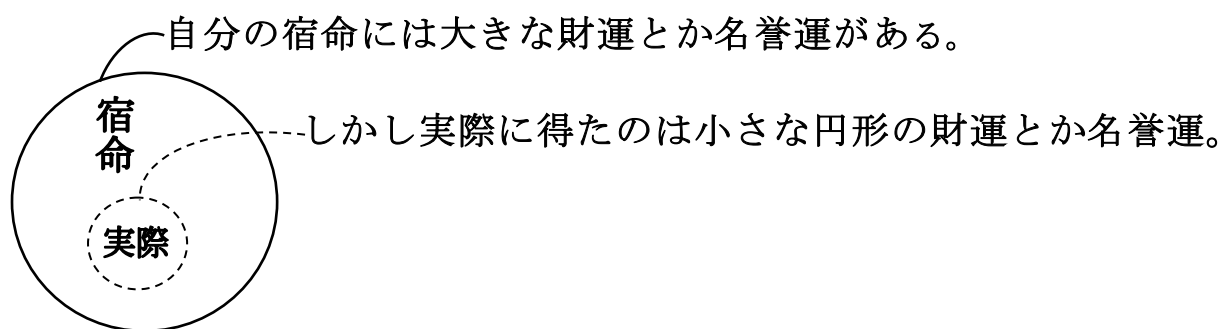
五徳〔福 寿 禄 官 印〕のなかで、『禄＝財』があまり大きくないということなら、あまり無理をしないほうが、最終的にはその人なりの財産をも残せますし、その人にとって一番充実した人生になるはずですよ。

お金「財」が必要以上に多くなってしまうと、その財産が、その人自身を苦しめるという作用になります。

自分にそうおう相応した分だけの、財産とか、あるいは、名誉とかが備わっている姿が、その人が一番自分らしく生きられる生き方です。と算命学は考えています。

☞ [たとえば] このような人もいます……。

宿命（14）名誉



自分の宿命には、大きな円形の財運とか、名誉運があるのに、実際には小さな円形の財運とか、名誉運しかないという場合は、この人の宿命にとっては不足なのです。

そうしますと、自分の宿命にとって不足している部分が、わざわい禍 となって、この人に跳ね返ってきます。

自分の宿命に本来あるべきものが不足すると… わざわい禍 にな

るのです。

多く取り過ぎて、禍になるのは仕方がないけど、不足したから、禍になるのは、たまらないですよ。

理不尽なようですが、算命学はそのように考えています。

参考・理不尽（すじみちが通らないこと）

身体も、栄誉が不足すれば、足りない分は、必ずその人に禍となって返ってきます。それとおなじです。

実際に足りないのなら、足りるように不足分を増やさないとダメなのです。

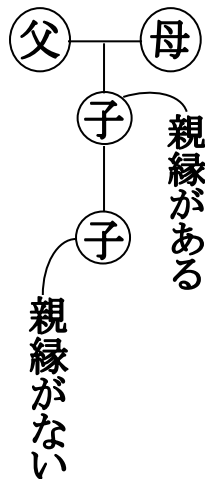
財運とか、名誉運とかは、わかりやすいと思ひまして、たたき台としてつかいました。

それとおなじように……親子関係とか、夫婦関係とか、さまざまな事象に、このような現象があらわれます。

参考・事象（ことの成り行き）

☞ 親子関係の場合を考えると、どうでしょう。

### 宿命（15）親子関係



〔たとえば〕ここに両親がいます。

その両親から〔親と縁がある子供〕と〔親と縁がない子供〕が生まれたとします。

通常、親はそのことがわからないので、2人の子供をおなじように育てます。しかし、育て方が子供の宿命に合うのか、宿命に合わないのかで、子供の育ちが<sup>そだ</sup>大きく違ってきます。

それはどういうことなのかといえ、<sup>おやえん</sup>親縁のない子は、親と縁がないので、親から<sup>きび</sup>厳しくされるとか、放っておかれるとか、冷たくされるとか、そのようにされても、〔親に縁がない〕というのが宿命どおりですから、その状況でも育って行くわけです。

反対に、親縁のある子は、〔親に縁がある〕わけですから“親縁がない育て方をされると”伸びなくなるのです。つまり、育たないということです。

∞ これは考え方なのですが——。

厳しく育てると ⇒ 親縁の無い子が伸びる(育つ)

厳しく育てると ⇒ 親縁のある子は伸びない(育たない)

優しく育てると ⇒ 親縁の無い子は伸びない(育たない)

優しく育てると ⇒ 親縁のある子は伸びる(育つ)

「親縁のない子」は、親に縁がないのです。

それなのに優しく、大切に育てられてしまうと、その子は育たないし、伸びない子になってしまいます。

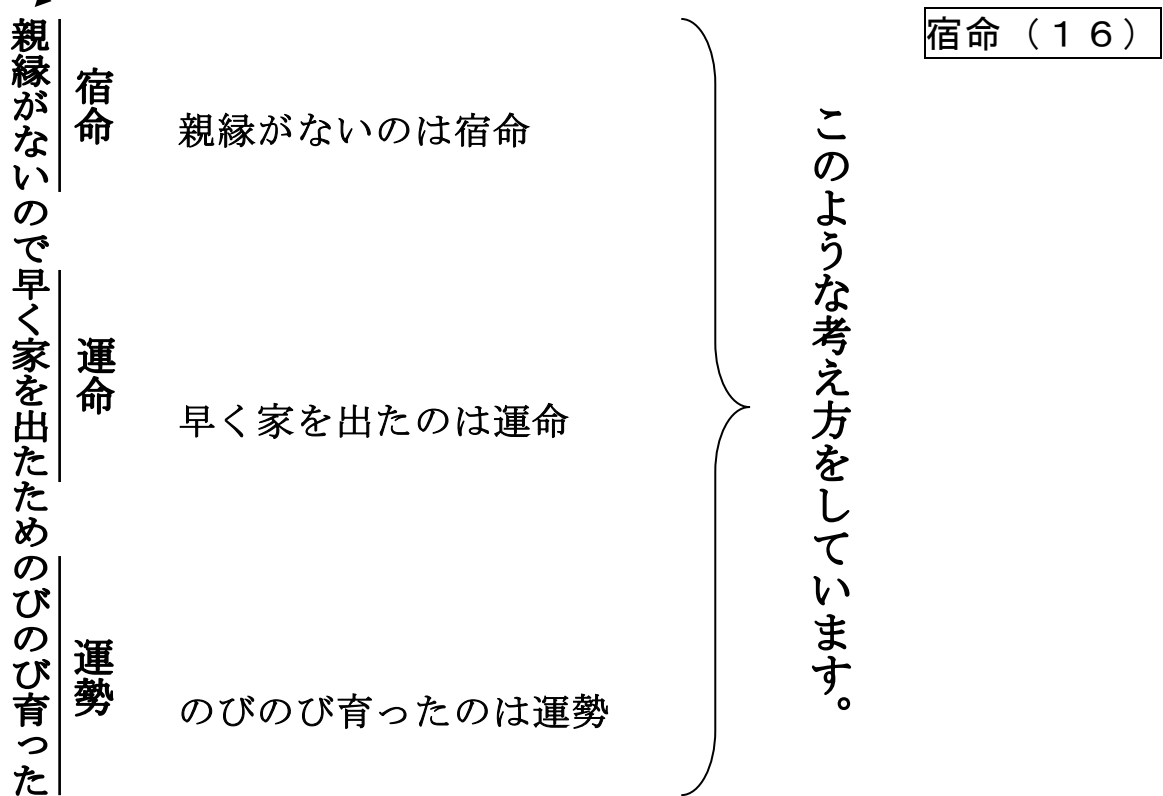
反対に「親縁のある子供」は、親に縁があるわけですから、親から大事に育てられると、伸びて行きます。

それゆえに、自分の子供であっても、<sup>いちりつ</sup>一律な育て方ではいけませんよ。ということになります。

親と子供の<sup>たましい</sup>魂は別です。兄弟でも魂は別です。

それゆえに、性格も生き方も異なって行くのです。

⇒ この文章のなかに「宿命」「運命」「運勢」と書かれています。



$$\text{宿命} + \text{運命} = \text{運勢}$$

宿命と運命を理解できて、はじめて運勢を論ずることができます。

「宿命」と「運命」と「運勢」については、すでに勉強しました。

宿命と運命……宿命は変えることの出来ないもの、運命は変えることの出来るもの、宿命と運命を足した（併せたもの）が運勢であり、その人の現在の姿です。

運勢 ⇒ その人の運の勢いを観て行くわけです。

運勢は、いついかなるときでも、勢いがあるというわけではなくて、良いときもあれば、悪いときもあります。良いときのほうが少ないのですが、そのときに、どのように過ごして行くのか、それが問われます。

「宿命のとおり生きる事が、役目を果たすことになる」

算命学では、「宿命のとおり生きる事が、役目を果たすことになる」と考えています。

自然思想というなかでお話しましたように、どんな人でも、自分がこういう人間で生まれて来るということを、自分で選んで、自分で希望して、生まれてきたわけではないという考え方でした。(算命学の考え方ですよ)

生まれつき明るい性格だろうと、おとなしい性格だろうと、気が強い人だろうと、気が弱い人だろうと、それは自分で選んだ性格ではない。と算命学は考えています。

算命学は、その人物が固有の性格・資質を有して、一人の人間として生まれて来たのであれば、自然がその人物

に、何かしらの役目を与えてくれて、その人物でなければ果たせない〔なにかがある〕から、その人物が生まれて来るのだ。という考え方をしているわけです。

※ このような考え方に異論のある方もいらっしゃるかと思いますが、  
算命学はこのように考えていると、ご理解ください。

そうしますと、宿命通りに生きることが、自然が与えてくれた役目を果たすことになる。と算命学では考えています。

宿命どおりの生き方をすることで



「最も自分らしい生き方となる」このようになります。

その人にとって「一番価値のある幸せな生き方」だと、  
いうふうに考えているのです。

**宿命(1) 運勢の仕組み** **宿命(3) 人生の道** に出てきましたが、

宿命からはずれた分だけ、病気になるということを、譬<sup>たと</sup>え  
としてとりましたけど、この禍<sup>わざわい</sup>は病気だけとは限らない  
のです。家庭が崩壊するという禍も有り得ます。そして

自分ではなくて、代わりに子供が犠牲になるということも起こります。

あるいは、親とか兄弟が犠牲になるという事態も有り得ます。

わざわい  
禍 というのは、必ずしも自分自身に降りかかって来るとは限らないのです。

それは、どこに出るかというのは、きちんと宿命を読むことで、こたえを出すことができます。

算命学では、人様の占いをさせていただくときも、その人が出来るだけ、宿命のとおり生きる方法をまずは見つけて、その方向に沿うように、提言するのが基本です。

あまりにも、成功し過ぎている人がいたとしたら、少し成功を抑える方向へ、提言するということもあるわけです。

☞ 成功といえは——地位が高いとか、名誉が高いとか、それらの事象を成功と捉える人もいるでしょう。

あるいは、お金持ち・財があるとかを、成功とみる人もいるでしょう。

そういう意味では、実際に名誉が高いけど、本来の宿命

どうりに歩んでいないと観たときには「中庸……つまり宿命のバランスを取るためにも、名誉を抑える生き方をしたほうがよいですね」というような提言をすることもあるわけです。

そうしないと、宿命から外れて、自分の福（幸せ）を失うことに繋がるかも知れません。

個々の宿命によりますけど、『五徳』の占いに繋がっていきます。

五徳というのは〔福・寿・禄・官・印〕のことですが、人間はだれでも五徳を備えていて「人間にそなわっている五つの運勢」と考えています。これは算命学の勉強でご理解できます。

⇒ 仕事にしても、その人の宿命に沿った仕事というのがあります。

それは「生年月日」から割り出した宿命に書いてありますので、それに沿って提言するようになります。

そのほうが、その人にとって生きやすいのです。

それをする、それをしない、については、ご本人の自由ですけど、宿命には書いてあります。

それゆえに、宿命どおりに生きる道筋を探します。

宿命を観て「こういう生き方がこの人にとって宿命どおりです」というのを見つけ出すのが、占いのうえでも、重要な焦点になります。

参考・どうり⇒（道理）物事のそうあるべきこと。当然のすじみち。

参考・どおり⇒（通り）それに従ってそのままであることを表す。

それに加えて、その人物の実際の生き方を重ね合わせて観るわけです。（その内容はさまざまですけど……）

〔たとえば〕この人の場合は、結婚が宿命から外れているとか、この人の場合は仕事が宿命から外れているとか、この人の場合は、親子関係が宿命から外れているとか、というふうにして観てゆくことで、この先……この人はどうなるのか、という占いのこたえが出るわけです。

「宿命のとおりに生きる」ことを、お勧めしますが、ただし、人間は1人で生きているわけではありません。親子とか、夫婦とか、ご本人を取り巻く人たちとの組み合わせによっては、どうしても宿命通りには生きにくいという場合もあるのです。➡

「親の宿命」と「子供の宿命」を出して見たときに……

親 ⇒ 子縁がある（親は子供と縁がある）

子供 ⇒ 親縁がない（子供は親と縁がない）

親の宿命には「子縁がある」と書いてあるのに、子供の宿命を出して見たら「親縁がない」と書いてある場合があります。

この親子関係は「親のほうには子供に縁がある」と書いてあるわけです。

そうしますと、この親が自分の宿命通りに生きようと思えば、子供と一緒に暮らす、つまり子供との縁<sup>えにし</sup>を篤<sup>あつ</sup>くして暮すことが、宿命に合っているわけです。

その姿であれば、親にとっては「宿命のとおり」ということになります。

子供のほうは「親と縁がない」と書いてあるわけです。

当然、子供は親と一緒に暮らしているわけです。

ところが、親が子供の世話をあれこれ焼いてしまうと、

この子供は宿命から外れて行きます。

この子の運勢がドンドン駄目<sup>だめ</sup>になるのです。

子供の運勢が落ちていくこととなります。

それゆえに、親縁の無い子供は、早く親元から離すことです。なぜなら、この子供は親縁が無いわけですから、親との縁をうすくして、生きていくことが宿命のとおりです。そうすることで、子供の運勢が伸びて行くのです。

親に子縁がある場合には、親は子供と一緒に暮らすことが宿命どおりです。

(親は子縁があっても、子供のほうは親縁がない関係もあります)

子供に親縁がない場合には、子供は親から離れて生きて行くことが宿命どおりです。

(子供は親縁がなくても、親のほうは子縁がある関係もあります)

ところが……親の側とすれば、親のほうは子縁があるから、子供との縁を篤<sup>あつ</sup>くするのが宿命のとおりです。

それなのに、子供に出て行かれてしまった親のほうは、宿命から外れることとなります。

このような場合は、どうなるのでしょうか……？ ➡

「2人が自分の宿命のとおりには生きることができないのです」  
つまり、宿命どおりに生きられるのは、どちらか一方です。  
親か子供のどちらかです。  
このような組み合わせも有り得るのです。  
もしも、このような状況になってしまったら、ご自分で  
選ぶより、なすべき方法はないわけです。  
きび  
厳しいですね。

☞ ご夫婦でよくあるのです。

夫 — 家庭的

妻 — 非家庭的

夫は家庭的な宿命です。ところが、妻の宿命を出してみると、非家庭的な宿命です。

奥さんは非家庭的ですから、家から出て、外で活躍しながら、生きて行くほうが宿命どおりです。

ところが、夫は家庭的ですから、奥さんにはいつも家庭にいる。家庭的な妻を望むわけです。

奥さんが我慢して、いつも家にいてくれると、夫の運勢は伸びて行きます。それは夫の宿命に合っているからです。

ところが、奥さんの運勢はドンドン悪くなって行きます。奥さんが家から出て、活躍するようになると、奥さんの運勢は伸びて行きますが、夫の運勢は下がって行くことになります。

片方を立てれば、片方が立たない、という組み合わせになってしまうわけです。

本来、こういう組み合わせの場合は、最初から結婚しないほうが賢明けんめいなのです。

結婚する、結婚しない、どちらを選ぶのか、本人が決めるより仕方ないのです。

〔半分ずつ我慢する〕というやり方もあります。

具体的な観方は先に進んでから勉強していくようになります。

人間は、1人で生きているわけではありません。

算命学は「宿命通りに生きなさい」といいますが、完全に宿命のとおりとおりに生きている人はいないのです。

どの人でも、多かれ、少なかれ、多少は宿命から外れて生きているのが、ふつうです。

それは仕方ないことですが「なるべく宿命に沿うように生きて行きなさい」「宿命から大きく外れないように、生きて行きなさい」と、算命学はっています。

なぜなら、宿命から大きく外れると、戻ることができなくなるのです。

それは結果的に、死に繋<sup>つな</sup>がることがあり得るからです。

【初年】 1 1 回目【宿命と自然】 終わります

つぎの授業 ⇒ 【初年】 1 2 回目【本能論】